心ゆたかに

第１２号
発行日
平成9年11月1日

発行　袋井市横井115-3
㈱　天　峰
TEL0538-43-6773
FAX0538-43-7250

念願の書院、客殿完成

興徳寺住職　八神英典様

「素晴らしい玄関ですね。」、「桧の五寸角柱で堂々としていて、木の香りがいいですね。」「廊下が広くてゆとりがありますね。」等々の感想をいただいています。

興徳寺は、この地区一帯が壊滅したと言われている安政の大地震で倒壊し、窮乏の中、再興されました。その後、昭和十九年の東南海地震で大きく傾きましたが、大修理をしました。昭和五十八年には、茅葺きの屋根替えが不可能であるため銅板葺きをして現在に至っています。

客殿がなかったため、大勢集まった時には、不便をきたしていました。末寺の最後の合併で施食会等の法要での状況から、平成七年、役員会で正式に議題として検討しました。景気下降の中での理解が難しいということで、地区会を開いて住職が出席して理解を深めていただき、増改築の決意に踏み切ることができました。総務、建築、会計の三委員会へ役員全体が携わり、建設へ取り組む態勢ができあがりました。

平成八年二月、新貝一級建築事務所と設計管理の契約をし、半年間で本堂との取り合い、手洗い所、給湯室を合わせて工夫設計していただきました。

建設事業所については、寺社建築で実績のある天峰建設に満場一致で決定しました。九月末より解体を開始、十月十六日地鎮祭、パイプ打ちをしての頑丈な基礎作りを経て、十二月六日上棟式と順調に進みました。桧の五寸角の柱は、骨組みだけでも重厚さを感じました。大工工事は、寒風吹きすさむ中で行われ、ベテラン、若手それぞれに優れた腕と個性を持ち、連携も良く細かい作業を綿密に取り組む姿勢には感服いたしました。特に、玄関の銅板一文字段葺千鳥破風入母屋の造りは、いつになったら覆われるか気が気でないくらい念入りに取り組んでいただきました。

澤元社長は、奈良、京都はもとより西に東に、寺社の見学による研修をされているとのこと、その結集を酷使していただいたものと思います。「大無所住而生其心」建築に対する真実の心、理想を目指して進む心を追い求める精神がすべてに通じていると思います。

本堂との取り合い工事での基礎の変更、柱の交換、大間床下の修理等で工期が遅れましたが五月中旬完成して、高い格天井で広く感ずる客殿で五月二十三日、建設、設計関係者、役員、婦人会役員、梅花講員出席のもと落成式を行って「こけら落とし」をし、八月七日山門施食会に檀家一同参詣のもと落慶法要を行うことができました。

その後、定期的に巡回もしていただき、今後よりよい維持を保っていきたいと思っています。

お酒造りに、夢と感動を

花の舞酒造㈱ 杜氏土田一仁氏

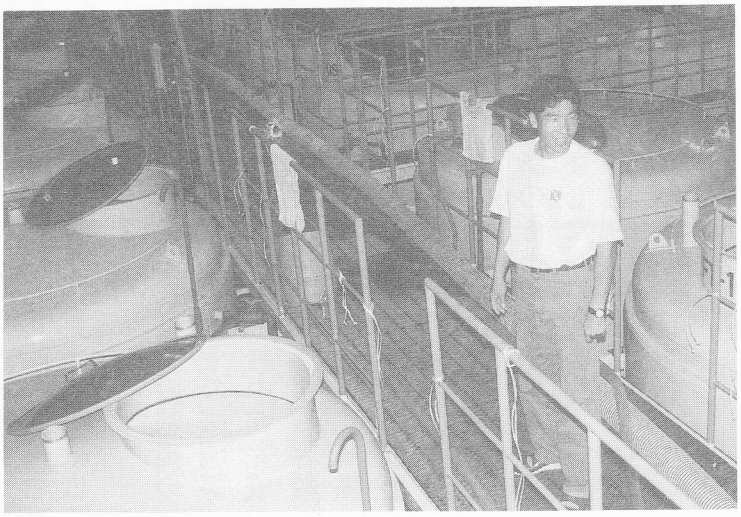
一〇月は各地で豊作を祝う秋祭りが、にぎやかに行われています。この時期に清酒の原料になる酒米も、各地で収穫されています。お酒好きの人には楽しみな季節がやってきます。そしてこれから忙しくなる仕事が、お酒を造る仕事《杜氏》です。今回は浜北市宮口の「花の舞酒造株式会社」で杜氏をしている、土田一仁さんにお会いしてお酒造りへのこだわりなどをお聞きしました。

杜氏のお話しの前にお酒のできるまでを紹介しましょう。お酒の歴史は、稲作の伝来に伴って大陸から伝わったのではないかといわれています。昔からお酒は神事には付き物で、朝廷、神社を中心に造られていましたが、鎌倉、室町、江戸時代と一般の人にも盛んに造られるようになりました。

お酒ができるまでの工程は①原料の酒米を精白します。（清酒では約六〇％に精白）②精白した酒米を蒸す。③蒸した酒米の一部を麹にする。④酒母の育成（酵母を培養する）⑤もろみの仕込み。麹と蒸米と仕込み水、酒母を三回に分けて仕込む（初添、中添、留添）そして約二〇日間発酵させる。発酵によりアルコールが生成され、アルコール分は約一八～二〇％になります。⑥発酵終了後圧搾して粕を分離し清酒となります。

花の舞酒造さんでは原料の酒米は浜北市、細江町、浜松市都田町など近郊の農家と契約しており、上質の酒米の確保に努力しています。また、仕込み水も赤石山系から湧き出る地下水を地下一〇〇メートルからくみ出しています。

杜氏の土田さんは全国的にみても年齢が三八才と若く、後継者が不足している杜氏の世界では珍しいのではないでしょうか。現在ではお酒造りにもコンピューターが活用されているので、タンクの中の温度も自動的に管理をしてくれるのですが、それだけでいいお酒ができるとはかぎらないようです。お酒は生き物なので発酵が思う様にならなかったり、途中で発酵が止まってしまってアルコール分が低くなってしまうことがあるようです。その年の気候や温度、湿度なども関係しますし、原料の酒米のできによっても違います。毎年が一年生で初心を忘れない事が大切です。毎日の管理としては一日に三回くらいタンクの中のもろみをかき混ぜ、その時にもろみの発酵具合を観察しています。



土田さんが杜氏をやっていてよかったと思うときは、花の舞のお酒がおいしくなったといわれた時、そしてお酒を通していろいろな人と知り合えたことだそうです。お酒造りに対する想いとしては、地元の酒米を使い端麗辛口のサラッとした花の舞独自の酒をつくりたい。そのお酒を地元の人達に飲んでもらい、喜んでもらうことです。大吟醸のような高価なお酒も大事ですが、毎日飲めて喜ばれ地元の人の生活の中に溶け込めて、地元の人に誇りに思ってもらえるようなお酒を造ることが土田さんの夢です。

寺院建築の進め方

日本テンプルヴァン(株)
井上文夫

寺院建築という業務を、住職お一人の仕事から「組織の仕事」へともっていき、大勢の力を活用した事業にしていくためには「建設委員会」を設けて進めていくべきである、ということを前回までにご説明しました。今回はその運営の進め方や建設委員会の役割についてお話しをさせていただきます。

「建設委員会の運営」

まず委員会のスタートにあたり、選ばれた方々にその気になっていただきかつ「建設委員」であることの責任感をもっていただくために「委嘱状」を作成し、委員お一人づつに住職からお渡しいただくのもいいでしょう。尚、委嘱状へ記入する文言は、例えば本堂の建設の場合であれば「委員名・あなたを当山本堂建設委員に委嘱します・○○山△△寺・住職名・年月日」というシンプルなものでいいのです。

その上で第一回目の委員会の冒頭で、前回ご説明しました「建設委員会の位置づけ」や「建設委員会に付与されている権限」などにつきご説明いただくことが必要です。

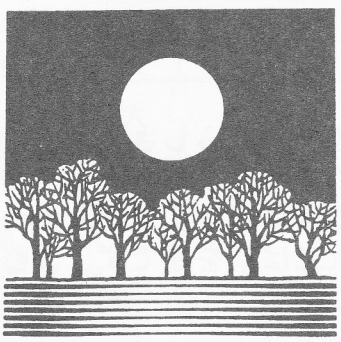
また建設委員会も委員からなる組織ですから「責任者」といいましょうか、「リーダー」を置かねばなりません。通常の場合「委員長」を決めます。皆さんの総意で選ばれるのがいいでしょうが、長い間の円滑な運営を考えますと、住職が予め候補を考えておく必要があります。この委員長が決まれば、以降はこの委員長に運営をリードしていっていただくことになります。

「建設委員会の役割」

形だけではない、実質的な委員会の機能を発揮していただかなければ委員会を設置した意味もないですし、やる気のある委員の方に対しても失礼になります。逆に委員一人づつの力や持ち味を上手く引き出し、大勢の力を合わせることができれば、成功間違いなしでしょう。

委員会の役割としては次のように実に多岐に亙った事項があります。

①寺院建築についての勉強会・見学会の実施　②建築の基本計画や予算書案の作成　③寄付金の募集方法の立案・募集とその管理業務　④設計者・施工者との折衝や業者の選定のための準備と資料の作成　⑤責任役員会への諮問と報告業務　⑥裁量権限内の出納業務・入金の管理とその記帳など経理業務　⑦特別会計に関する業務（予算書・閉鎖決算書の準備）　⑧定期的な工程会議への出席　⑨地鎮祭や上棟式、引き渡し等の儀式への出席　⑩落慶法要や完成祝賀会の立案とその実施などで、最後に建設委員会を解散するまでが役割になります。



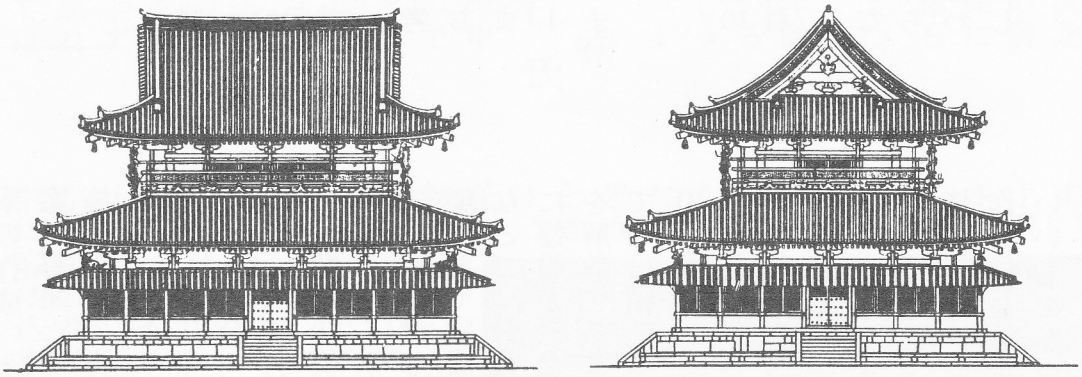
具体的になれば他にも行うべき業務はあると思いますが、これを住職一人で行おうとする方が無理です。関係者の皆さんに仲間に入っていただいて共同作業にして進めていった方が、きっといいものが出来上がることになります。

次回は設計や施工業者の選定について触れたいと思います。

寺院建築の様式の変遷

飛鳥時代の仏寺建築

概要	①四天王寺（百済様式）、法隆寺式等、七堂伽藍の制によって建立する。 ②平地に建て、廻廊内に塔、金堂を配置する。 ③堂宇は矩形または方形の平面をなし、南面させる。建築手法は工夫を自由に凝らし、一定の木割法らしきものはない。 ④堂宇の基壇は２段の石造りとし、その上に瓦を敷き詰める。 ⑤絵様および彫刻はきわめて少ない。
柱	①柱全長の下から３分の１の辺りに最も膨らみが多く、上部に向かって細く、下部はわずかに太さを減じる。 ②柱下には礎盤を設けず、柱は自然石の上に建てる。
斗組	①雲斗、雲肘木を用い、大斗の下に皿斗を用いる。 ②肘木には笹繰り、繰出しがある。
軒	①一重軒で軒天井は設けない ②尾垂木の先端は垂直に切る。
垂木	①粗大にして、一定の木割りはない。
屋根	①棟の両端に鴟尾、鬼瓦を置く、鴟尾を置いた例が多い。 ②軒の反り、箕甲の湾曲はともに少なく、本瓦葺きの傾斜は緩やかで、軒出しが深く、建物に重量感がある。
内部	①色彩を施す。 ②天井は組入れとし、支輪はほとんど直線で、上部でわずかに湾曲する。
外部	①外部はすべて丹塗りとし、木口には黄土を塗る。
主な遺構 法隆寺　金堂、五重塔、中門、廻廊（国宝）　奈良県生駒郡斑鳩町 法起寺　三重塔（国宝）　奈良県生駒郡斑鳩町	



法隆寺金堂

法隆寺の山門をくぐってまず伽藍配置のすばらしさ、まさに匠の技を痛感しました。地についたどっしりとした金堂、杉の大木のような五重塔、そこにたたずむと飛鳥時代に自分が立っているような気がしてきました。堂宮大工の基本がここにあり、匠たちの心いきが伝わってきます。『宮大工は堂を建てず、伽藍を建てよ』という声が、どこからか聞こえたような気がしました。

㈱天峰建設　澤　元　教　哲